高　等　学　校

平成２８年度

教育研究員研究報告書

国　語

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・１

Ⅱ　研究の視点・・３

Ⅲ　研究の仮説・・４

Ⅳ　研究の方法・・４

Ⅴ　研究の内容・・５

Ⅵ　研究の成果・・・２２

Ⅶ　今後の課題・・・２３

研究主題	自分の思いや考えを適切に言葉で表現する力を育む指導と評価の在り方

Ⅰ　研究主題設定の理由

1　新しい時代に求められる資質・能力

21 世紀に入り、急速な情報化やグローバル化、様々な技術革新による社会の加速度的な変化は、我々の生活に質的な変化をもたらしている。社会状況の変化に伴い、多様な教育課題に直面し、様々な教育改革に取り組んできた。そのような中、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に向け、次期学習指導要領改訂の基本的な考え方が示された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（以下「審議のまとめ」）によると、「学校教育がその強みを発揮し、一人一人の可能性を引き出して豊かな人生を実現し、個々のキャリア形成を促し、社会の活力につなげていくことが、社会的な要請ともなっている。教育界には、変化が激しく将来の予測が困難な時代にあってこそ、子供たちが自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくことができるよう、必要な力を確実に育んでいくことが求められている。」とある。現行の学習指導要領で既に明記されている「生きる力」の育成を教育の目的とし、自分で考え、判断し、表現する能力、問題発見・課題解決能力を、重視すべき資質・能力として示している。

また、次期学習指導要領では、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得)」②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等)」の育成」③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを社会や人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養)」を育成すべき資質・能力の「三つの柱」として整理し、これらを総合的にバランスよく身に付けることが、これからの社会を生き抜くために必要であると提言されている。

本研究では、異なる文化的背景をもつ者が協働して課題を解決しながら、持続可能な社会を形成していかなければならない社会状況の中で、言葉の力が果たす重要な役割の一つは、価値観の共有が困難な者同士で合意形成を見いだすためのツールであるとした。そして、あらゆる思考や学習活動の基盤であり、コミュニケーションや感性・情緒の基盤ともなる言葉そのものを学ぶ国語科の特質を踏まえて、上記三つの柱をそれぞれ次のように定義した。

① 「知識・技能」社会生活や専門的な学習に必要な言葉について、習得、活用、探究する力。

② 「思考力・判断力・表現力」多様な他者や社会との対話を通じて、言葉で的確に理解したり効果的に表現したりしながら自分の考えを深められる力。

③ 「学びに向かう力・人間性等」言葉を通じて他者や社会と関わることで、主体的に自己の考えを深めようとすることができる力。

2　生徒の現状と課題

OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2012 の結果を見ると、「読解力」の平均得点は比較可能な調査回以降最も高くなっていて、学力は世界的に見て高い水準にある（国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査のポイント」)。一方で、「自分の感情をコントロールすることにつながる『感情や想像を言葉にする力』や、他者との協働につながる『言葉を通じて伝え合う力』」や「『情報を編集・操作する力』、『新しい情報を、既にもっている知識や経験、感情に統合し構造化する力』、『新しい問いや仮説を立てるなど、既にもっている考えの構造を転換する力』などの『考えを形成し深める力』」（「審

議のまとめ」）等の育成が求められている。また、「平成 28 年度全国学力・学習状況調査（中学校第３学年　文部科学省）」では、「書くこと」について、文章を読み返し、文の使い方などに注意して書くことや根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことに課題があるとされており、読み手に対してどの部分が根拠であるかが分かるように示すなど、読み手を意識して文章を複数の観点から見直すよう指導することが重要であると指摘されている。さらに、高等学校国語部会の部員が日頃接している各校の生徒の実情として、次のような共通点が挙げられる。

- 主体的・協働的に学習に取り組む意欲が十分身に付いておらず、安易に正答を求める傾向が強い。
- 適切な言葉や表現を用いて、相手に伝えたり説明したりする上で必要となる語彙が乏しい。
- 収集した情報を目的に応じて分析・活用する力が不十分であり、情報に流されたり振り回されたりしている生徒が多い。

とりわけ、インターネットや SNS が普及する過程で、コミュニケーションの質が大きく変化しており、相手の反応とは無関係に自分の考えを一方的に発信したり、独りよがりな表現に陥りがちだったりと、他者に読まれる・聞かれるということへの想像力が不十分な生徒が多く見られる。加えて、場に応じた言葉を選択する力や、相手の心情を推し量ろうとする意識が低く、人間関係を構築するための言葉によるコミュニケーション能力に乏しいことも問題として挙げられた。そのような実情を踏まえて、本研究における現状と課題を以下のようにまとめた。

【現状】
- 主体的・協働的に活動するための言葉によるコミュニケーション能力が乏しい。
- 自らの学習活動を振り返り、次の学びにつなげる意識に乏しい。

【課題】
- 他者を意識した、よりよい表現を見いだす姿勢を身に付けさせる必要がある。
- 学習活動において、生徒自身が自覚的に振り返り、自己の課題を認識し、解決を図る力を身に付けさせる必要がある。

３　高等学校国語部会の主題について

言語能力の基盤を確実に育成し、コミュニケーション能力を高めることは、国語科の重要な役割である。平成 16 年の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、「言葉によって多様な人間関係を構築することのできる『人間関係形成能力』や目的と場に応じて『効果的に発表・提示する能力』は、現在の社会生活の中で強く求められている能力の一つであるが、これらの根幹にあるのもコミュニケーション能力であり、国語の力である」と示されている。本研究では国語の力の中でも、特にコミュニケーション能力に着目して研究を進めることとした。さらに、前述の現状と課題から、コミュニケーション能力の中でも、「目的と場に応じて効果的に発表・提示する能力」の育成が喫緊の課題であると考え、生徒のコミュニケーション能力を高める上で必要な力の一つとして「対話を通し、よりよい表現を見いだし書く力」について研究を進めることとした。

また、「審議のまとめ」には、学習評価について、指導と評価の一体化を図る中で、多面的・多角的な評価を行っていくことの必要性や、一人一人の学びの多様性に応じて、子供達の資質・能力がどのように伸びているかを、子供達自身が把握できるようにしていくことの重要性が示されている。したがって、高等学校国語科における指導上の課題を解決するに当たっては、適切な評価についても一体的に研究することが求められるものと考える。

以上、高等学校国語の学習指導における課題の解決に向けた指導と評価の在り方を研究するため、高等学校国語部会では「自分の思いや考えを適切に言葉で表現する力を育む指導と評価の在り方」を研究主題とした。

Ⅱ　研究の視点

１　アクティブ・ラーニングと言語活動

高等学校の国語科における課題として、教材の読み取りが指導の中心になりがちで、一つの正答や一義的な解釈の理解にとどまり、国語による主体的な表現等が重視されていないことが指摘されてきた。前述した現状と課題の背景には、このような指導上の課題があるものとも推察される。

現行の学習指導要領において、言語活動の充実が示され、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の配当時間が明示されていることからも、話し合い（「話すこと・聞くこと」）や論述（「書くこと」）の学習指導が重要であることは明らかである。

平成 26 年の中央教育審議会の諮問の中で、「必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的･協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある」とし、特に高等学校における授業改善を求めている。

本研究においては、「審議のまとめ」に示された、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業実践の研究を行うこととした。

２　「書くこと」における主体的・協働的な学びの考察

前述のとおり、国語科としては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の３領域の学習活動をバランスよく行っていく必要があるが、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の指導が十分に行われていないという課題がある。

中でも、「平成 27 年全国学力・学習状況調査の結果」を見ると、中学校国語において主として活用に関して問う国語 B の正答率は、「話すこと・聞くこと」72.6%、「読むこと」63.0%に対して「書くこと」は 37.2%であり、書く能力の低さが顕著にうかがえる。また、同資料には「書くこと」の領域に関して、「伝えたい事柄が相手に伝わるように書くこと」、「根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くこと」に課題があると分析している。

現代は、メールやブログ、SNS など、デジタルデータとして気軽に書いたことが、世界中に発信される時代であり、誰もが不特定多数の読み手に向けて書くことができる時代を迎えた。しかしながら、SNS 上では、文章構造を伴わない単語の羅列や、読み手への意識と論理性に欠けた個人の感覚的な言葉による情報発信が少なくない。

生徒たちは、対象が不明確なまま、言葉を一方的に発信することに慣れてしまっているため、他者意識が十分に育っていないのではないかと思われる。実際に国語の授業で書く学習を行わせると、生徒自身が本来伝えたいことを的確に伝えるためには、考えや思いを整理し、客観的かつ多面的な視点で文章を書く指導をさらに充実させる必要があると実感する。

書く行為は話す・聞くといった行為と異なり、文字として記録されたものが残るため、書き手自身が文を見直し推敲する過程で、自己の表現の是非や、他者に伝達されうる表現となっているかを確かめる機会が確保されている。その機会を十分に生かすことができれば、自分の考えや思いを整理した上で、論理を明確にして書く力は着実に身に付く。

そこで、目的（何のために書くのか）と相手（誰に対して書くのか）を明確にした「書くこと」の単元を設定するとともに、協働的に課題を解決するための言語活動を適切に実施することで、他者意識が醸成され、コミュニケーション能力の向上につながると考えた。本研究では、「話すこと・聞くこ

と」、「書くこと」、「読むこと」の３領域の中でも、「書くこと」に焦点を当てた主体的・協働的な学習の在り方を検証する。

３　学習評価の可視化と効果的な活用

学習評価は、「生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を教員が的確に捉え、指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学びを振り返り、次の学びに向かうために極めて重要である。

教員は、生徒一人一人が前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかを捉えていく必要がある。同時に、生徒自身は自ら学習の目標をもち、見直しを行いながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりできるようになることが大切である。そのためには、学習評価を可視化する必要がある。

生徒が学習の見通しをもって学習に取り組み、その学習を振り返る場面を適切に設定することが「主体的に学習に取り組む態度」を醸成するためには欠かせない。こうした姿を見取るためには、子供たちが主体的に学習に取り組む場面を設定していく必要があり、「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習・指導方法の改善が必要となる。

目標を明確化し生徒と教員が共有できるようにするとともに、生徒自身が目標に対する到達度を自己評価できる一つの方法として、本研究ではルーブリックを取り入れた。

Ⅲ　研究の仮説

本部会の研究主題および研究の視点を踏まえ、次のような仮説を設定した。

○　自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現する活動を行うことで、他者を意識したよりよい表現を見いだし書く力を育むことができる。

○　学習活動の到達目標を可視化し、振り返る経験を積ませることで、自らの課題を認識し、解決を図る力を育むことができる。

Ⅳ　研究の方法

仮説を検証するため、次のような方法で研究を行う。

１　具体的方策

○　自分の思いや考えを適切に表現させるために「書くこと」の単元を設定する。その際に、目的や対象及び論理性を意識できるような課題を提示する。

○　書いた文章の表現や論理性について、相互に考察したり、推敲したりする学習活動を通して、よりよい表現を見いだし書く力を育む。

○　評価基準を授業者と生徒が共有し、評価したものを有効にフィードバックさせるために、ルーブリックを用いる。

２　検証方法

○　自己の課題や改善点、及び生徒の表現の変容等が読み取れるワークシートを活用し、適切に言葉で表現する力の向上を検証する。

○　事後にアンケートを行い、評価指標を示した効果や課題を発見する力を検証する。

Ⅴ　研究内容

１　研究構想

全体テーマ　　**思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善**

高校部会テーマ　**新しい時代に求められる資質・能力を育むための、主体的・協働的な学習の指導と評価について**

各教科等における「新しい時代に求められる資質・能力」とは

【個別の知識・技能】　社会生活や専門的な学習に必要な言葉について、習得・活用・探究する力

【思考力・判断力・表現力等】　多様な他者や社会との対話を通じて、言葉で的確に理解したり効果的に表現したりしながら自分の考えを深められる力

【学びに向かう力、人間性等】　言葉を通じて他者や社会と関わることで、主体的に自己の考えを深めようとすることができる力

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】

○　主体的・協働的に活動するための言葉によるコミュニケーション能力が乏しい。

○　自らの学習活動を振り返り、次の学びにつなげる意識に乏しい。

【課題】

○　他者を意識した、よりよい表現を見いだす姿勢を身に付けさせる必要がある。

○　学習活動において生徒自身が自覚的に振り返り、自己の課題を認識し、解決を図る力を身に付けさせる必要がある。

高等学校国語部会主題

自分の思いや考えを適切に言葉で表現する力を育む指導と評価の在り方

仮　　説

○　自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現する活動を行うことで、他者を意識したよりよい表現を見いだし書く力を育むことができる。

○　学習活動の到達目標を可視化し、振り返る経験を積ませることで、自らの課題を認識し、解決を図る力を育むことができる。

具体的方策

○　自分の思いや考えを適切に表現させるために「書くこと」の単元を設定する。その際に、目的や対象及び論理性を意識できるような課題を提示する。

○　書いた文章の表現や論理性について、相互に考察したり、推敲したりする学習活動を通して、よりよい表現を見いだし書く力を育む。

○　評価基準を授業者と生徒が共有し、評価したものを有効にフィードバックさせるために、ルーブリックを用いる。

検証方法

○　自己の課題や改善点、及び生徒の表現の変容等が読み取れるワークシートを活用し、適切に言葉で表現する力の向上を検証する。

○　事後にアンケートを行い、評価指標を示した効果や課題を発見する力を検証する。

(1)　実践事例１

教科名	国語	科目名	国語総合	学年	1

１　単元（題材）名、使用教材

単元名　　「論語」を通して、今の自分を見つめ直す

使用教材　「論語－八章」

２　単元（題材）の指導目標

・過去の優れた作品から現代の自分につながる考え方を学び、生活に役立てる。

・他者に自分の考えを伝えるために、よりよく文章を記述するための方策を学ぶ。

・他者の文章や考え方について、的確に評価できるようになる。

３　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考力・判断力・表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
・古人の様々な考え方について理解し、現代の考え方との共通点や差異を理解している。また、他者と自分の考え方との共通点や差異を理解し、よりよい思考に結び付けられる。	・自分の経験や身の回りのことと関わりが深い論語を選び、それに基づく自分の意見や今後の展望を適切に表現している。 ・相手や目的に応じた語句を用い、文章を書いている。	・自分の経験や現状と関係が深い論語を選び、それに基づく自分の意見や今後の目標を適切に表現しようとしている。 ・ルーブリックを用いて、各自の文章について相互評価や自己評価を行おうとしている。

４　単元（題材）の指導と評価の計画

	学習活動	評価の観点			評価規準 （評価方法など）
		知	思	主	
第1次	・前単元まで取り組んだ「論語」の成り立ちや、授業で取り上げた章について振り返りを行う。 ・今の自分自身の課題や今後どうなりたいかを考え、その助言に適した論語を一つ選ぶ。	●	●		・ノートや生徒同士の発言を通して、知識の再確認を図っている。（行動の観察） ・自分の現状を振り返り、それに対応した論語の一節を選んでいる。（記述の確認〈ワークシート〉）
第2次	・ワークシートに自分の選んだ論語を書き写し、現代語訳を確認する。 ・なぜこの論語を選んだのか、この論語の一章を自分の将来にどう生かしていくか、学習プリントに記述する。		●	●	・ワークシートに自分の選んだ論語を書き写し、現代語訳を書き写している。（記述の確認〈ワークシート〉） ・自分の現状と、論語の一節に絡めた今後の目標を文章にしてまとめている。（記述の確認〈ワークシート〉）
第3次（本時）	・完成したワークシートの内容をお互いに読み合い、ルーブリックを基に相互評価を行う。 ・相互評価を受けて、自分の文章をどのように改善すればよいか振り返りを行う。		● ●	●	・生徒同士がお互いに文章を読み合い、評価指標に則って評価し合っている。（行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉） ・他者の評価を受けて、自分の文章を改善している。（行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉）

第4次	・前時の自己評価を受けて、自分の文章を清書する。 ・前回までの文章とどのように変化したかを自ら感じ取り、その内容を振り返り、今後の文章記述に生かす。		●	● ●	・他者の評価を受けて、自分の文章を客観視し、よりよいものにしている。（行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉） ・よりよい文章を書くための基準を自ら感じ取り、今後に生かそうとしている。（行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉）

5　本時

(1) 本時の目標

・自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現することで、客観性をもった文章を書くことができるようになる。

・学習活動の到達目標を可視化し、相互評価や自己評価を経ることで、自らの課題を知り、他者のよい部分を取り入れることができるようになる。

(2) 配布資料

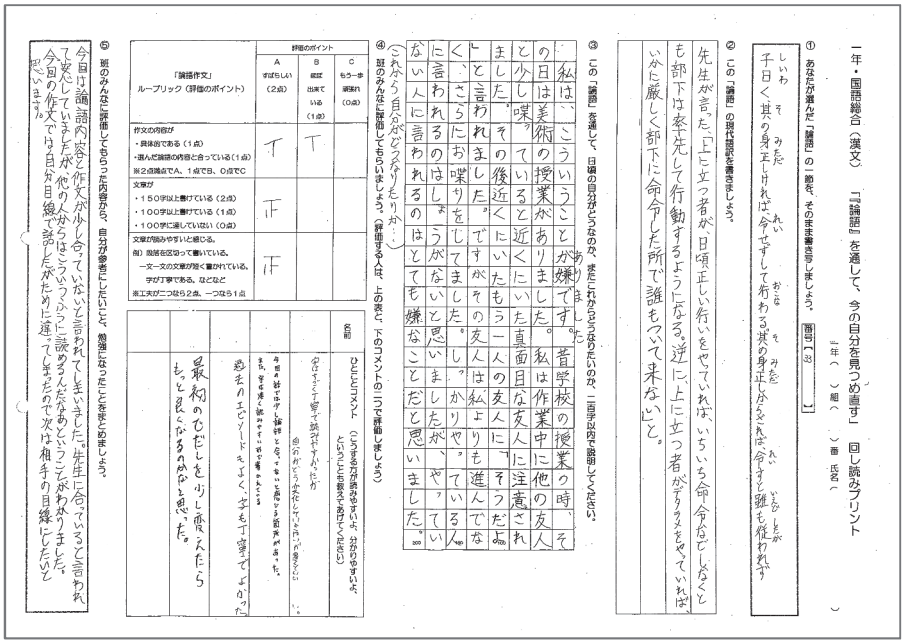
資料①「論語並べプリント」

論語から 40 章を抜粋し、書き下し文と現代語訳を併記したもの。授業者から見て、特に生徒が理解しやすく、共感を得やすいと思われる章を中心に抜粋した。

資料②「論語回し読みプリント」

生徒が自分で選んだ論語の章について、要約や選んだ理由を記述し、その内容について他の生徒が評価・コメントをするためのもの。

配布資料（資料②）


一年・国語総合（漢文）　『論語』を通して、今の自分を見つめ直す」　回し読みプリント

① あなたが選んだ「論語」の一節を、そのまま書き写しましょう。　四字［　分］

子曰く、其の身正しければ、令せずして行わる。其の身正しからざれば、令すと雖も従われず

年（　）組（　）番　氏名（　　）

② この「論語」の現代語訳を書きましょう。

先生が言った。「上に立つ者が、日頃、正しい行いをやっていれば、いちいち命令などしなくとも部下は率先して行動するようになる。逆に、上に立つ者がデタラメをやっていれば、いくら厳しく部下に命令した所で誰もついて来ない」と。

③ この「論語」を通して、日頃の自分がどうなのか、また、これからどうなりたいのか、二百字以内で説明してください。

私は、こういうことが嫌です。昔、学校の授業の時、その日は美術の授業がありました。私は作業中に他の友人と少し喋っていると近くにいた真面目な友人に注意されました。その後近くにいたもう一人の友人に「そうだよね」と言われました。ですがその友人は私よりも進んでなく、さらにおしゃべりをしてました。しかりやっている人に言われるのはしょうがないと思いましたが、やっていない人に言われるのはとても嫌なことだと思いました。

（これから自分がどうなりたいか…）

④ 班のみんなに評価してもらいましょう。（評価する人は、上の表と、下のコメントの二つで評価しましょう）

「論語作文」ルーブリック（評価のポイント）	評価のポイント A すばらしい（2点）	B 頑張って出来ている（1点）	C もう一歩頑張れ（0点）
作文の内容が ・具体的である（1点） ・選んだ論語の内容と合っている（1点） ※2点満点で A、1点で B、0点で C	正	正	
文章が ・150字以上書けている（2点） ・100字以上書けている（1点） ・100字に達していない（0点）	正		
文章が読みやすいと感じる。 例）段落を区切って書いている。 一文一文の文章が短く書かれている。 字が丁寧である。などなど ※上夫が二つなら2点、一つなら1点	正		

				名前
	最初のひだしを少し飛ばしたらもっと良くなるのかなと思った。	先生のエピソードをよく、字も丁寧でよかった。	自分の経験を論語と結びつけていて、共感できる。また、字も丁寧で読みやすいと思った。	ひとことコメント（こうすると伝わるかもしれない、分かりやすいよ、ということを教えてあげてください）

⑤ 班のみんなに評価してもらった内容から、自分が参考にしたいこと、勉強になったことを書き出しましょう。

今回は論語内容と作文が少しかみあっていないと言われてしまいました。先生に合っていると言われて安心していましたが、他の人からはこういうふうに読めるんだなあということがわかりました。今回の作文では自分目線で書いたがために通じてしまったので次は相手の目線にしたいと思います。

(3) 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	・前時までの振り返りを行う。 ・本時の学習内容の目標と流れを理解する。		

展開①	30分	・５～６人で一つのグループを作り、各自が記述したワークシートの内容を回し読みする。自分以外の生徒のワークシートについて、ワークシート配布時に示した評価基準により、ルーブリックでの相互評価及び意見欄への記入を行う。	・ICT 機器の活用や板書により本時の活動を整理し、掲示する。 ・一人の文章を５分程度で回し読みできるように、授業者が時間を示し、回し読みを促す。	イ行動の観察、記述の確認（ワークシート） ウ行動の観察
展開②	10分	・相互評価の内容を踏まえて、文章のどの部分を改善すればよいのかを検討し、その内容をワークシートに反映させる。	・文章の改善に当たっては、赤ペン等での加筆・修正とし、過去の文からの変遷を分かりやすくする。	イ行動の観察、記述の確認（ワークシート）
まとめ	5分	・ワークシートの振り返りの項目で自己の取組状況や達成度を文章で自己評価し、授業者に提出する。		イ行動の観察

(4) 評価指標

		評価のポイント		
		A すばらしい（2点）	B ほぼ出来ている（1点）	C もう一歩頑張れ（0点）
「内容」	エピソードが ・具体的である。（１点） ・選んだ論語とリンクしている。（１点） ※２点満点でA、１点でB、０点でC	具体例があり、選んだ「論語」の章に対応している。	具体例がある。または、選んだ「論語」の章に対応している。	具体例がなく、選んだ「論語」の章に対応していない。
「分量」	文章が ・150 字以上書けている。（２点） ・100 字以上書けている。（１点） ・100 字に達していない。（０点）	150 字以上書けている。	100 字以上、150 字未満である。	100 字に達していない。
「表現」	文章が読みやすいと感じる。 （例）段落を区切って書いている。 一文が短く書かれている。 字がていねいである。 ※工夫が二つあれば２点、一つなら１点。	文章を読みやすくする工夫が二つ以上ある。	文を短く区切る、段落構成が考えられているなどの工夫が一つある。	文章を読みやすくする工夫がされていない。

今回は、班ごとにプリントを回し読みする過程において相互評価を行ったため、ルーブリックに基づく評価記入表をワークシートに載せ、生徒が評価結果を「正」の字で記入できるようにし、自分の手元に返ってきたときに一目で総合的な評価が分かるようにした。

また、これまで他者の文章を評価する経験がない生徒がほとんどのため、項目を「内容」「分量」「表現」の３観点とし、評価を「A」「B」「C」の３段階と簡略化し生徒が評価することに対して消極的にならないようにした。

６　本時の振り返り

(1) 前時までの学習について

「論語」の成り立ちや孔子、儒教についての知識を再確認した後、資料①を配布して書き下し文と現代語訳を読ませ、自分が共感できる章を選ばせた。次時の準備として、選んだ章の内容を踏まえて、日頃の自分についての振り返りや、将来の自分の目標について他者に説明する文章をワークシート（資料②）に記入させた。その際に、評価指標をあらかじめ示して、その内容に注意しながら文章を作成するように指示した。

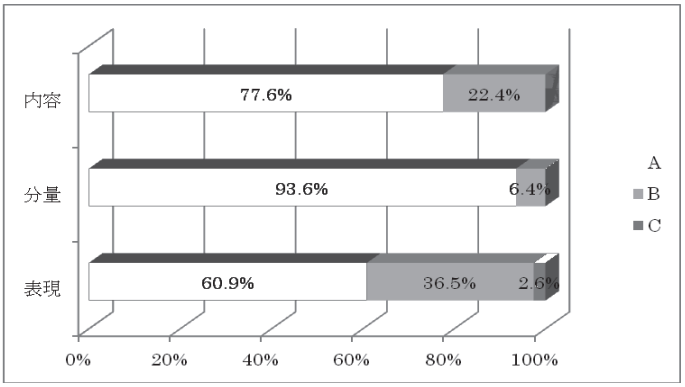
(2) 本時

ア　評価指標に基づく相互評価

文章を記入したワークシートを班ごとに回覧し、お互いに書いた文章を読み合う時間を設けた。その上で、評価指標の各基準に基づいて書かれているかを評価し、結果をワークシートの表に記入させた。

事前に評価指標で 150 字以上書くことが示されているため、多くの生徒が「分量」の観点では高い評価となった。また、「内容」「表現」では、どの観点でもＡ評価が過半数を占めた。「他者を評価する」ことの意図が伝わらず、安易に高い評価を選択した生徒がいたことが考えられる。ただし、「表現」の観点では他に比べて評価にばらつきが見られ、生徒によって文章を見る観点や注意している点に異なりがあることを見取ることができた。

評価指標に基づく相互評価の結果

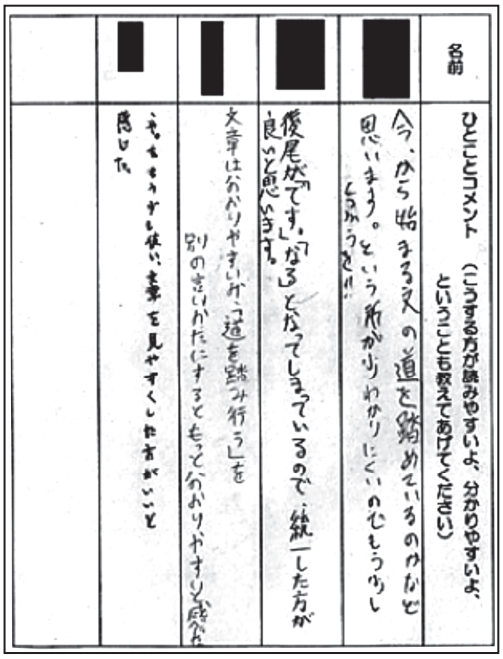


イ　文章による相互評価

ルーブリックによる相互評価に加え、文章記述による相互評価を行うことも試みた。今回は短文記述により評価することとした。回し読みを始める前に、授業者から生徒に、評価指標でＡを付けた場合はどこがよかったのか、Ｂ・Ｃを付けた場合はどうすれば良くなるのかを、評価する相手に正確かつ具体的に伝えられるように配慮しながら記述するよう指示した。その結果、以下のようなコメントが記入された。

・「選んだ論語の内容と文章の内容が合っていて、とても分かりやすかった」
・「段落分けをしっかりしていたし、一つ一つの文も短くて分かりやすい」
・「語尾が「です」、「なる」とバラバラになってしまっているので、統一した方がよい」
・「自分が経験した出来事を細かく書いていたのはよかったけれど、これから自分がどうしたいかをもっと具体的に書いた方がよかったと思う」

文章での相互評価の一例



班内の他の生徒の記述を見ながら文章を見渡すことで、自分が気付かなかった部分についても注意が向けられる効果や、他の生徒の文章をまねて分かりやすく文章を書くことができるという効果が見られた。

ウ　文章の推敲

ルーブリック及び記述での相互評価を経て、自分のところに戻ってきた文章を推敲した。本時においては、文章の変遷を自分で明確に見直せるように、赤色のボールペンで文章に加筆・修正していく形をとった。

生徒の様子を見ると、誤字・脱字の修正や句読点やカギ括弧の書き方、行頭下げなど、表記上の修正についてはすぐに取り掛かれていたものの、どのような文を加筆・修正すればよいか、また記述による評価で内容の修正や変更を指摘された点についてどのように書き直せばよいかという部分では多くの生徒が手を止めてしまったため、例を示したり、他の生徒の推敲を参考にさせたりした。

推敲後の文章

エ　本時の振り返り

相互評価を経て、また他の生徒の文章を読んで、参考になったことや達成度、感想を記入させたところ、以下のようなコメントがあった。

・「みんなに評価してもらい、自分では気付けない部分が結構分かったので、よい機会だった」

・「自分の経験を分かりやすくきれいにまとめられている人がいたので参考にしたいと思った」

・「意外に自分の文章ではミスが多いことが分かった。周りの人に見てもらえると明白なので今度は見てもらってしっかり直したい」

相互評価において全観点でA評価だった生徒でも、今後の改善点について触れている感想が多く、他の生徒の文章や記述による評価から得たものが多くあった。

(3)　次時以降の学習活動

ア　文章の書き直し

前時で回収したワークシートに授業者からの助言や表記上の誤りとして漏れている部分を加筆して生徒に返却し、原稿用紙を新たに用いて文章の書き直しを行った。

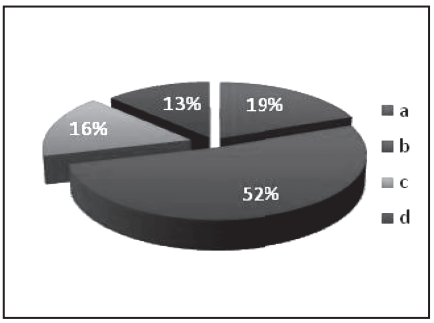
イ　アンケート調査

(ｱ)　質問①：目的や対象に応じた表現

71％の生徒が、今回の授業を通して、読み手である他の生徒に対して、内容を分かりやすく伝えることを意識していたと述べている。

質問１　授業の課題を通して、読み手に分かりやすく伝えることを意識しましたか。

回答		%
a	意識した	19%
b	概ね意識した	52%
c	あまり意識しなかった	16%
d	意識しなかった	13%

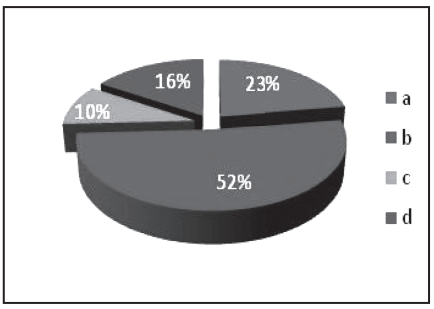


(ｲ)　質問②：相互評価による自己改善

75%の生徒が、他者の文章や発想を参考にして、自分の文章を改善できたと述べている。

質問２　他者の文章や発想を参考にすることで、自分の文章が改善されましたか。

回答		%
a	改善できた	23%
b	概ね改善できた	52%
c	あまり改善できなかった	10%
d	改善できなかった	16%

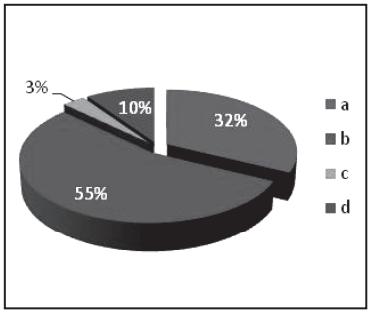


(ｳ)　質問③：評価基準の共有による有効性

87%の生徒が、評価基準をあらかじめ示したことで、評価のポイントや到達目標を意識できたと述べている。これは他の質問に比べて、特に肯定的な意見が多い項目となった。生徒それぞれが、多種多様な文章を記述する上で、明確に評価基準を示すことが大切であると示す結果となった。

質問３　ルーブリックを見て、評価のポイントや到達目標を認識しましたか。

回答		%
a	認識できた	32%
b	概ね認識できた	55%
c	あまり認識できなかった	3%
d	認識できなかった	10%



(ｴ) 質問４：自己の課題認識

自由記述の形式で、今回の授業を通しての「自己の課題認識」に触れた。特に多かったのが「字を丁寧に書く」という、基本的な内容であった。普段から生徒に繰り返し伝えていることではあるが、他者に読まれる、または他者の文章を読む中で、基本に立ち返る大切さを改めて認識できたと言える。また、段落構成に触れた内容や、自分の考えをいかに相手に正しく伝えるか、といった点に触れた意見も複数あった。

質問４　授業を通して自分が認識した課題は何ですか。具体的に教えてください。（抜粋）

・字を丁寧に書く。（９人）

・自分の考えを、正しく相手に伝えるための技術を身に付ける。（５人）

・段落を区切ったり、一つ一つの文を短くしたり、読み手に読ませやすい文章を作る。（３人）

・他の人の文章のよいところ、悪いところをしっかりと見付けられる力を身に付ける。

(ｵ) 質問５：「優れた表現」をするために

質問４と併せて、今回の授業の課題である「優れた表現」とは何か、生徒に質問した。内容や表記など、今回の学習内容に沿った意見が多く出た反面、日常の生活からの変容を訴える声もあった。

質問５　「優れた表現」をするために、どんなことが必要だと思いますか。具体的に教えてください。（抜粋）

・具体的に、読み手に分かりやすく書くこと。（７人）

・相手が読んできちんと意味が通じるか、客観的に自分の文章を見る視点をもつこと。（５人）

・語彙力を増やすこと。（４人）

・普段から読書をして、よい文章に出会って、その知識や書き方を吸収すること。（３人）

・周りの人のアドバイスや、他の人の文章を頼りにして、自分の文章を磨くこと。

(4) 課題及び改善策

ア　ルーブリックの評価指標を活用した目標設定の明確化

今回の評価指標では、ルーブリックを３段階にすることで簡潔に評価できるように試みた。しかし、実際にはＣ評価を付けた生徒がほぼおらず、過半数の生徒がどの観点でもＡ評価を付けてしまった。これは評価される側から見ると「到達目標に十分達している」と捉えられかねない。

今後は、生徒自身がより意識的に学習活動を行うために、相互評価をする目的を明示していく。また、評価指標をより具体的にすることで生徒の到達目標を明確にし、他者を意識した「書く力」を身に付けさせるように工夫する。

イ　「優れた表現」の明確化

今回の評価指標では、「内容」、「分量」、「表現」の三つの観点で、評価の条件をある程度示し、その上で生徒がお互いの文章を読み、相手の「優れた表現」を見付けることがねらいであった。しかし、「表現」については、授業者からワークシートにいくつかの具体例を挙げて示したものの、生徒

は多種多様な文章に対してどのような表現が「優れた表現」なのかを判断できずにいた。そこで、今後は、授業者が具体的な例を示すことで、生徒がある程度の基準をもてるようにしていきたい。

(2) 実践事例２

教科名	国語	科目名	国語総合	学年	2

１　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

単元名　「本歌取りをした詩歌を作ろう」

使用教材　「伊勢物語」　―初冠―

２　単元（題材）の指導目標

・場面にふさわしい語句を用いて、心情を適切に表現することができる。

・自ら書いた文章について、表現の工夫をわかりやすく他者に説明することができる。

・他者の文章や考え方などを取り入れ、自らの文章に活用することができる。

３　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考力・判断力・表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
・和歌の表現技法について、理解している。 ・語彙や語句などを理解し、自らの文章で活用している。	・場面にふさわしい語句を用いた詩歌を作っている。 ・相手や目的に応じた語句を用いて、適切な表現を考え文章を書いている。 ・他者が書いた文章について、適切な評価を行っている。	・場面にふさわしい語句を用いた詩歌を作ろうとしている。 ・相手や目的に応じた語句を用いて、適切な表現を考え文章を書こうとしている。 ・他者が書いた文章について、適切な評価を行おうとしている。

４　単元（題材）の指導と評価の計画

	学習活動	評価の観点			評価規準 （評価方法など）
		知	思	主	
第1次	・「伊勢物語」の「初冠」を読み、本文の場面や心情と詠まれている和歌の関係を理解する。	●			・本文の内容を理解している。（行動の観察、記述の確認〈ノート〉） ・和歌の技法について理解している。（行動の観察、記述の確認〈ノート〉）
第2次	・「初冠」の場面の男の心情にふさわしい詩歌を選び、詩歌を書き換える。 ・詩歌を書き換えた際の注意点や工夫点はどこか学習プリントに記述する。	●	● ●		・場面にふさわしい語句を用いて詩歌を書き換えている。（記述の確認〈ワークシート〉） ・自分の注意点や工夫点を適切な語句を用いて表現している。（記述の確認〈ワークシート〉）
第3次（本時）	・完成した学習プリントの内容をお互いに読み合い、ルーブリックを基に相互評価を行う。 ・他者の発表を聞き、自分の詩歌や文章をどのように改善すればよいか自己評価を行う。		● ●	●	・生徒同士がお互いに文章を読み合い、決められた評価基準に則って評価し合っている。（行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉） ・他者の発表を聞いて、自分の文章を改善している。（行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉）

第4次	・前時の評価を受けて、自分の詩歌や文章を書き直す。 ・詩歌や文章がどのように変化したかを自ら感じ取り、その内容をまとめて、今後の文章記述に生かす。	●	●	●	・他者の評価を受けて自分の作品を客観視し、よりよいものにしようとしている。(行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉) ・よりよい文章を書くための基準を自ら感じ取り、その内容を今後に生かそうとしている。(行動の観察、記述の確認〈ワークシート〉)

5　本時

(1) 本時の目標

・自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現することで、客観性をもった文章を書くことができるようになる。

・学習活動の到達目標を可視化し、相互評価や自己評価を経ることで、自らの課題を知り、他者のよい部分を取り入れることができるようになる。

(2) 配布資料

資料①「学習シート」

伊勢物語「初冠」の場面にふさわしい現代の歌を探し、本歌取りを体験するためのもの。

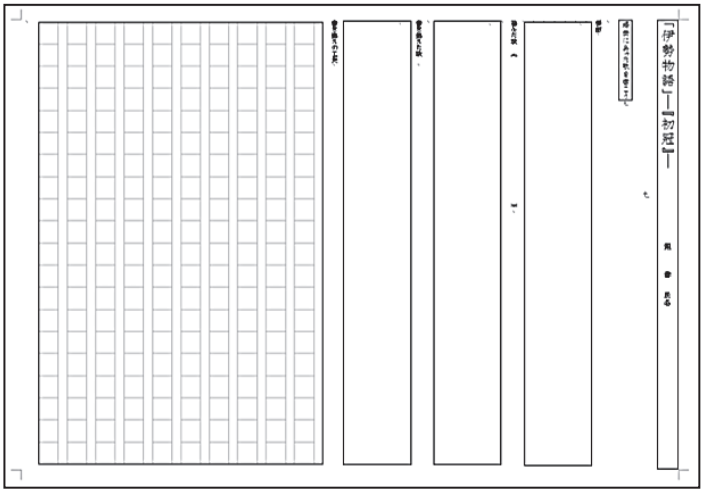
資料②「学習シート回し読みプリント」

資料①の内容を回覧した際に他者の工夫点などをメモしておくためのもの。

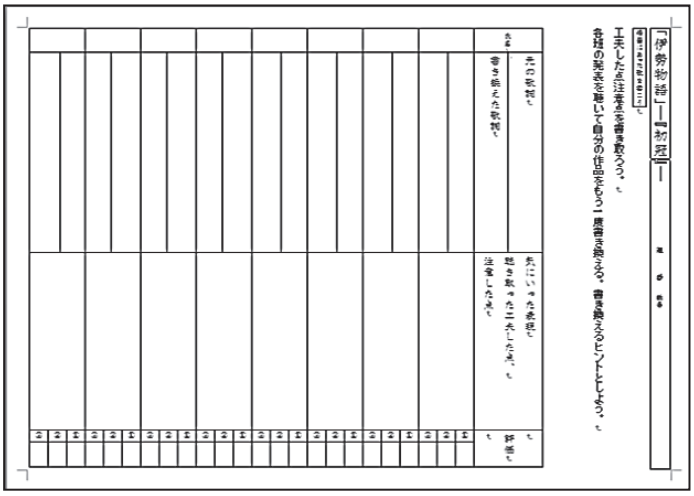
資料③「評価指標つきまとめシート」

資料①を記述するためのメモシート。評価指標に基づき、自ら工夫した点をまとめるもの。

配布資料（資料①）



配布資料（資料②）



(3) 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	・前時までの振り返りを行い、本時の展開と目標を理解する。	・評価指標を配布し、学習の到達目標を確認する。	
展開①	30分	・ルーブリックを基に、前時に作成した工夫点、目的をまとめる。 ・作成したメモを基に 200 字で文章を作成する。	・ルーブリックの指標を基に、メモを取らせ、到達点を確認させる。 ・主語述語のねじれ、誤字脱字等どこを評価されるかをあらかじめ確認させる。	ア（行動の観察・記述の確認〈ワークシート〉） イ（行動の観察・記述の確認〈ワークシート〉）

展開②	10分	・３人で一つのグループを作り、各自が記述した学習プリントを回し読みする。自分以外の生徒の学習プリントについて、学習プリント配布時に示したルーブリックの評価基準により、相互評価及び意見欄への記入を行う。 ・評価基準を基に、評価を行い点数が最も高い者を選ぶ。	・ルーブリックの指標を基に、文章を読ませ、客観的に文章を評価させる。	ア（行動の観察・記述の確認〈ワークシート〉） イ（行動の観察・記述の確認〈ワークシート〉）
まとめ	5分	・次回、作品の改善を行うことを伝える。		ア（記述の確認〈ワークシート〉）

(4) 評価指標

評価のポイント				
	S （３点）	A （２点）	B （１点）	C （０点）
書き換えの工夫	歌の書き換えで工夫した点が明確に書かれており、その目的も明らかに述べられている。	歌の書き換えで工夫した点が書かれており、その目的も述べられている。	歌の書き換えで工夫した点か、工夫した目的が述べられている。	歌の書き換えで工夫した点も、工夫した目的も述べられていない。
表現 主語述語のねじれ 常体と敬体の混同	誤りが１個もない。	誤りが３個以内である。	誤りが10個以内である。	誤りが10個以上ある。
誤字脱字衍字	誤りが１個もない。	誤りが３個以内である。	誤りが10個以内である。	誤りが10個以上ある。

６　本時の振り返り

(1) 前時までの学習について

「伊勢物語」の成立や「初冠」の主人公についての知識を確認した後、本歌取りについて学習をした。資料①を配布し、「初冠」の登場人物の関係や歌を詠んだ状況を確認し、自らが場面にふさわしいと考える現代の歌を選ばせた。本歌取りを理解させるために、自らが選んだ現代の歌の歌詞を織り交ぜて、作詞をさせた。その際に評価指標を示し工夫点が明確になるように作詞を行わせた。

(2) 本時

ア　工夫点のまとめ

評価シートがついたまとめシートを用いて、自らが作詞をした際の工夫点をまとめさせた。評価指標を掲載しておくことで、自らの工夫点が明確にされているか、いないのかの判断をする生徒が多く見られた。

イ　自らの工夫点をまとめた文章の作成

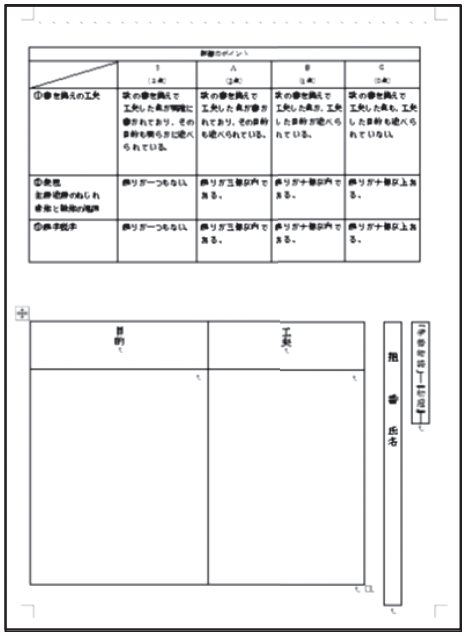
資料③を基に、工夫した点を資料①の原稿用紙に文章で説明させた。作詞をした際に工夫した点について、生徒自身が明確にすることで、他の生徒に伝えるための文章を書くことでができた。

ウ　評価指標に基づく相互評価

文章が記述されたワークシート（資料①）を班ごとに回覧し、お互いの文章を読みあう時間を設けた。評価指標の各基準に基づいて書かれているかを評価し、その結果をワークシート（資料②）に記入させた。「表現」、「誤字脱字」の設問では、他者の文章を読んで誤りを指摘するという行為に

慣れない部分があり、相互評価を開始してすぐの段階では、ほとんどの生徒がＳ評価を付けていた。しかし、授業者が誤りを指摘して初めて、誤字や主述のねじれ等に気付く生徒もいた。表現の工夫を評価する場面では、Ｓランクの「明確」という語句に戸惑う生徒も多く、より具体的な指標を示す必要がある。

配布資料（資料③）



エ　記述による相互評価

文章を読んで評価を行うだけでなく、書き直しを行う際に参考にしたいと思われる歌詞中の表現の工夫を、相互評価を行った際にワークシート（資料②）に書き写させた。その結果、以下のような記述が見られた。

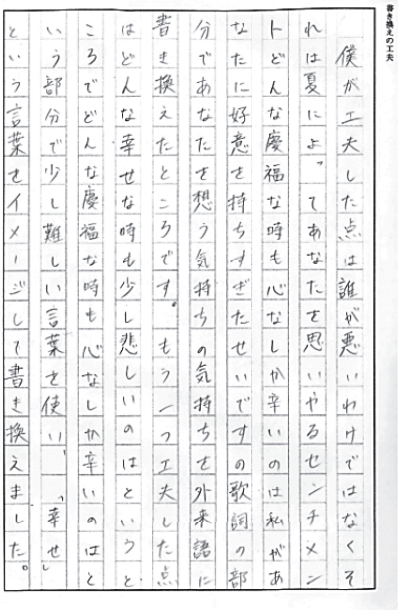
・相手が読みやすい文は何かと、相手の気持ちを考えた。
・具体的にすることで、意味が伝わりやすくなると思う。
・書いている相手が普段から使っている言葉は、伝わってくる気がする。

(3) 次時以降の学習活動

ア　歌詞の書き直し及び文章の書き直し

相互評価を行ったワークシートを回収し、授業者による誤字脱字や表記の訂正を加筆して生徒に返却し、再びワークシート（資料①）を用いて書き直しを行った。他の生徒による評価や、他者の工夫を見て再び書き直しを行うことで、前時まで独力では書けなかった生徒たちも、円滑に書き直しを行うことができた。

初発の文章



書き直した文章

イ　全体的な振り返り

本歌取りの体験を通して、生徒たちは歌を書き換える困難さを学んだ。また、自らが困難に感じたこと、工夫したことを文章で伝えることの大変さを改めて学んだ。その上で、相手に説明をするための文章には、適切な表現であるとともに、他者を意識した表現が必要であり、今回の授業を通して、それを学ぶことができたという発言をする生徒が多く見られた。

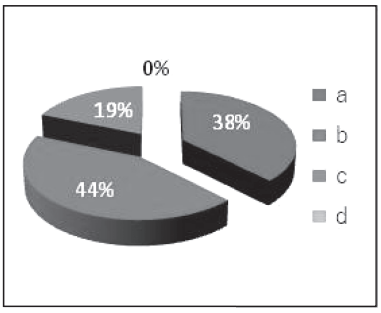
ウ　アンケート調査

(ｱ) 質問①：目的や対象に応じた表現

全体の８割強の生徒が、読み手を意識した表現を行ったと述べている。また、「意識しなかった」と答える生徒はいなかった。これは授業者が終始授業の目的や対象とする生徒について触れ、意識付けがしっかりとなされていたからだと思われる。

質問１　授業の課題を通して、読み手に分かりやすく伝えることを意識しましたか。

回答		%
a	意識した	38%
b	概ね意識した	44%
c	あまり意識しなかった	19%
d	意識しなかった	0%

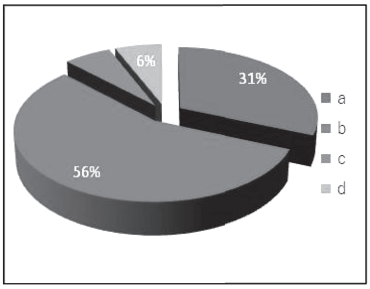


(ｲ) 質問②：相互評価による自己改善

９割近くの生徒が、他者の文章や発想を参考にして、自分の文章を改善できたと述べている。前回の検証授業に比べて、相互評価がスムーズに行えたことや、評価すべき点を明確にできたことが生徒にとって効果的であったと考察できる。

質問２　他者の文章や発想を参考にすることで、自分の文章が改善されましたか。

回答		%
a	改善できた	31%
b	概ね改善できた	56%
c	あまり改善できなかった	6%
d	改善できなかった	6%

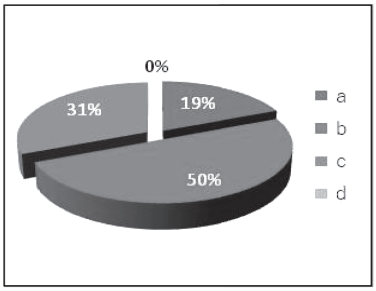


(ｳ) 質問③：評価基準の共有による有効性

69%の生徒が、評価基準をあらかじめ示されたことで、評価のポイントや到達目標を意識できたと述べている。他の質問と比べると、肯定的な意見が若干減少したが、相互評価で他の生徒の意見や文章を見ることで参考になった点がより印象深かったため、このような結果になったと考えられる。

質問３　ルーブリックを見て、評価のポイントや到達目標を認識しましたか。

回答		%
a	認識できた	19%
b	概ね認識できた	50%
c	あまり認識できなかった	31%
d	認識できなかった	0%



(ｴ) 質問４：自己の課題認識

自由記述の形式で、今回の授業を通しての「自己の課題認識」に触れた。この事例では、他者を意識した課題が多かった。自分では滞りなく伝わると考えていた文章が、相手に正しく伝わらなかったり、意味を取り違えたりした例もあり、相互評価の難しさと大切さが再認識された。

質問４　授業を通して自分が認識した課題は何ですか。具体的に教えてください。（抜粋）

・みんなに分かりやすく書いたつもりでも、まだ足りないところがあった。

・自分がよいと思っても、相手もそう思うとは限らないので、どう説得したらよいかを考えた。

・文章をまとめきれなかったり、語彙力の不足を感じたりした。

(ｵ) 質問５：「優れた表現」をするために

質問４と併せて、授業の課題である「優れた表現」とは何かを生徒に質問した。この事例では、場面に応じた表現をすることや読書機会を増やすなど、日頃から意識すべき点が多かった。

質問５　「優れた表現」をするために、どんなことが必要だと思いますか。具体的に教えてください。（抜粋）

・場面にふさわしい言葉遣いで、分かりやすい言葉を用いていること。

・自分の意見が明確に述べられていること。

・分量の多い本や見本になる文を日頃から見付けて、まねをすること。

(4) 課題及び改善策

ア　ルーブリックによる評価指標での段階設定

前回の検証授業を受けて、ルーブリックの段階数を増やし、到達目標を更に引き上げる工夫を行ったものの、内容の評価の文言にある「明確」という言葉が生徒たちに混乱を生じさせた。「明確」では、具体的にどこに注目すればよいのかが分からなかった。「根拠が二つ以上述べられている」など、生徒にも分かりやすい指標にする必要があった。さらに、誤りの個数に応じた評価段階を設定してしまったが、自らの課題を知り、次のステップに向けて学習していくためには、減点方式ではなく、加点方式による評価段階を作成していく必要がある。また、誤りの個数を基に評価段階を設定するためには、なぜこの個数だとその評価になるのかというように、根拠を示す必要があった。

(3) 実践事例３

教科名	国語	科目名	国語総合	学年	２～６

１　単元（題材）名、使用教材

単元名　　解説文を書く

使用教材　　夏目漱石「夢十夜」

２　単元（題材）の目標

・論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめる。

・他者の表現に接して、よりよい表現の条件を考えたり、書いた文章についての自己評価や相互評価を行ったりして、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。

３　単元（題材）の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考力・判断力・表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
・書くことに必要な文の組み立てについて理解している。 ・ルーブリックに示されている条件が、今回目標とすべき「よい表現」であることを理解している。	・自分の考えの妥当性を裏付ける客観性の高い資料を用い、自らの論が成り立つ根拠を示している。	・表現の仕方についての評価を通して得たことを論理の構成や展開を工夫して書くことに生かし、説得力のある文章にしようとしている。

4　単元（題材）の指導と評価の計画

	学習活動	評価の観点			評価規準 （評価方法など）
		知	思	主	
第1次	・「夢十夜」の「第一夜」を読み、あらすじを書く。 ・筋を追う上で、意味の分からない言葉（キーワード）を辞書で調べ、物語の中での効果を考える。	● ●			・指定字数であらすじを書くことができる。（記述の確認〈ワークシート〉） ・積極的に調べ、物語と言葉の意味を結び付けて考えている。（行動の観察）
第2次	・前回書いたあらすじを紹介し、そこからキーワードを三つ挙げる。 ・ルーブリックに示した到達目標を理解し、「第一夜」の内容を解説する文章（以後、解説文）を書く。 ・参考資料を読み、校正用原稿用紙に解説文①を書く。		● ●	●	・ルーブリックを意識して解説文を書こうとしている。（記述の確認〈ワークシート〉） ・参考資料を読み取り、解説文①を書くことができる。（記述の確認〈ワークシート〉）
第3次（本時）	・他者の書いた解説文①を読み、自分の書いた文章の参考にする。 ・原稿用紙に解説文②を書き直す。 ・自分の文章をルーブリックで評価し、自らの課題を書き出す。	●	●	●	・他者の文章を参考にして、自分自身の表現を工夫することができている。（記述の確認〈ワークシート〉）

5　本時

(1) 本時の目標

・自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現することで、客観性をもった文章を書くことができるようになる。

・学習活動の到達目標を可視化し、相互評価や自己評価を経ることで、自らの課題を知り、他者のよい部分を取り入れることができるようになる。

(2) 配布資料

資料①「シンボル事典（抜粋）」（北星堂書店 1985 年）

キーワードの「百合」、「露」、「曙」、「星」を抜粋したもの。

資料②「ワークシート」

１枚で下書き、推敲用メモ、清書、ルーブリック（評価のポイント）、自己の課題を認識できるもの。

(3) 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
10分	・教師による推敲のデモンストレーションを見る。	・生徒の書いた文章をプロジェクターで写し出し、教師が文章を書いた生徒と対話しながら、ルーブリックでよい点、直す点など評価していく。	
15分	・他の生徒の書いた解説文①を回し読みし、お互いに参考にしたい点をメモしていく。	・一部ずつコピーした解説文①を時間を区切って回し読みさせる。	ア（記述の確認〈ワークシート〉）
15分	・メモを参考にして、再度解説文②を書く。	・書けないでいる生徒には個別に対応する。	イ（記述の確認〈ワークシート〉）

5 分	・振り返りシートで、書いた文章を自己評価し、 自らの課題の変容を把握する。		

(4) 評価指標

評価のポイント			
	A　十分に満足 （3点）	B　概ね満足 （2点）	C　努力が必要 （1点）
①〈分量〉 字数制限を守っている。	最後の行まで書いている。	1～3行空いている。	4行以上空いている。
②〈日本語の表記〉 誤字脱字がない。 主語述語のねじれがなく読みやすい 字が丁寧である。	正しくかつ丁寧に日本語が書けており、誰が読んでも読みやすい。	やや誤りや文字の乱雑さが見られるが、読み取れる。	文章や文字に誤りが多く、読みにくい。
③(1)〈内容〉 第二段落から第三段落への論理的なつながりがあり、説得力がある。	第二段落と第三段落のつながりが見事で説得力がある。	一部不要な説明もあるが、大体納得できる。	第二段落と第三段落につながりがなく納得できない
③(2)〈構成・独創性〉 一読では分からない作品の深い魅力について、段落構成を練り、個性的で豊かな発想で書いている。	第三段落が発想豊かな表現で展開されている。	第三段落で第二段落をまとめられている。	第三段落で第二段落と同じことを書いている。

6　本時の振り返り

(1) 前時までの学習について

第1次では、「夢十夜」の「第一夜」を読み、あらすじを200文字で書かせた。あらすじを書く上で必要なキーワード、一読しただけではよく分からないがキーワードとなりそうな言葉を挙げていき、辞書で調べさせた。キーワードには、本文からは読み取れない「象徴」としての意味があることを確認させた。第2次では、「第一夜」の解説文の下書きをさせた。書く目的や対象を明確にし、解説文を書くための留意点はルーブリックの項目③（1）（2）に示した。下書きは段落の書き出しを指定したワークシートに記述させた。なお第2次と第3次（本時）は、2時間連続での授業である。

(2) 本時

ア　評価指標に基づく相互評価

まず、ワークシートの評価指標を再度確認させ、どの項目をポイントに推敲するかを確認させた。前時に生徒が書いた下書きの一部をプロジェクターで投影し、授業者が評価採点するデモンストレーションを行った。特に、文のねじれの直し方や論理的な文章として不要な部分、よりよく言い換えた表現などを指摘した。時間をかけ、自分の文章と見比べさせた上で、生徒自身が必要だと思うことをメモさせた。

相互評価など協働的な学習の経験が乏しく、推敲の仕方が分からない生徒には、どのようにすればよいかを実際に示すことが有効であった。

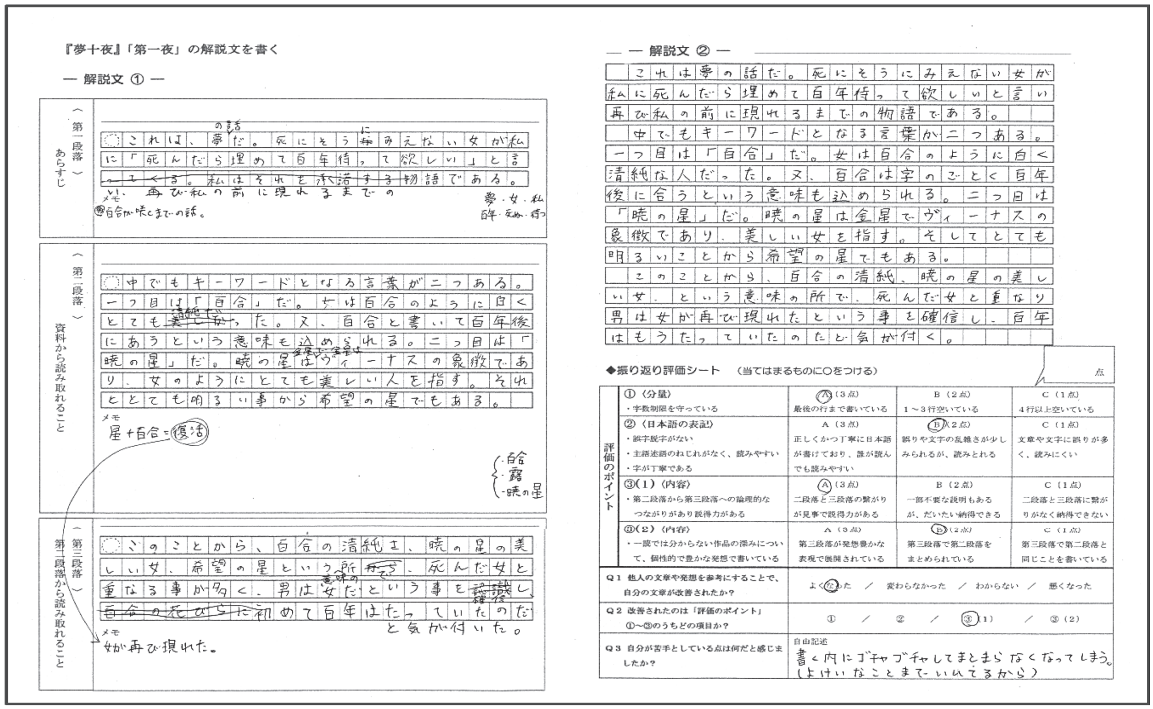
イ　文章による相互評価

生徒が記入したワークシートを回し読みさせた。その際、ワークシートのメモ欄に、ルーブリックと照らし合わせながら、自分にはなかった文章をよくするための視点や表現を記入させた。文章に論理性があるかどうかの推敲は難しかったようで、一部の生徒しかできていなかった。しかし、キーワードが「象徴」するものを「シンボル辞典」から抜き出すことや、第三段落のまとめ方については、ほとんどの生徒がメモを作成して清書の際に活用できていた。他者の文章を評価するのは

難しかったようだが、他者の文章から自分になかった語彙や表現を学び取れた生徒が多かった。

１枚のワークシートで、下書き、推敲用メモ、清書、ルーブリック（評価のポイント）、自己の課題認識ができるようなものを用意した。なお、相互評価のデモンストレーションとして、授業者がプロジェクターを使用するため、文字が大きく見えるように横書きとした。

配布資料（資料②）


『夢十夜』「第一夜」の解説文を書く

— 解説文 ① —

（第一段落）あらすじ

これは、夢の話だ。死にそうに見えない女が私に「死んだら埋めて百年待って欲しい」と言う。そして、再び私の前に現れるまでの物語である。

メモ 夢・女・私 百合が咲くまでの話。 解・死ぬ・待つ

（第二段落）資料から読み取れること

中でもキーワードとなる言葉が二つある。一つ目は「百合」だ。女は百合のように白くとても清純な人だった。又、百合と書いて百年後にあうという意味も込められる。二つ目は「暁の星」だ。暁の星はヴィーナスの象徴であり、女のようにとても美しい人を指す。それとても明るい事から希望の星でもある。

メモ 星＋百合＝復活

（第三段落）第二段落から読み取れること

このことから、百合の清純さ、暁の星の美しい女、希望の星という所から、死んだ女と重なる事が多く、男は女だという事を認識し、百合の花びらに初めて百年はたっていたのだと気が付いた。

メモ 女が再び現れた。

— 解説文 ② —

これは夢の話だ。死にそうにみえない女が私に死んだら埋めて百年待って欲しいと言い再び私の前に現れるまでの物語である。中でもキーワードとなる言葉が二つある。一つ目は「百合」だ。女は百合のように白く清純な人だった。又、百合は字のごとく百年後に合うという意味も込められる。二つ目は「暁の星」だ。暁の星は金星でヴィーナスの象徴であり、美しい女を指す。そしてとても明るいことから希望の星でもある。このことから、百合の清純、暁の星の美しい女、という意味の所で、死んだ女と重なり男は女が再び現れたという事を確信し、百年はもうたっていたのだと気が付く。

◆振り返り評価シート　（当てはまるものに○をつける）　点

評価のポイント	A	B	C
①（分量）・字数制限を守っている	(A)（3点）最後の行まで書いている	B（2点）1～3行空いている	C（1点）4行以上空いている
②（日本語の表記）・漢字誤字がない・主語述語のねじれがなく、読みやすい・字が丁寧である	A（3点）正しくかつ丁寧に日本語が書けており、誰が読んでも読みやすい	(B)（2点）誤りや文字の乱雑さが少しみられるが、読みとれる	C（1点）文章や文字に誤りが多く、読みにくい
③(1)（内容）・第二段落から第三段落への論理的なつながりがあり説得力がある	(A)（3点）二段落と三段落の繋がりが見事で説得力がある	B（2点）一部不要な説明もあるが、だいたい納得できる	C（1点）二段落と三段落に繋がりがなく納得できない
③(2)（内容）・一読では分からない作品の深みについて、個性的で豊かな発想で書いている	A（3点）第三段落が発想豊かな表現で展開されている	(B)（2点）第三段落で第二段落をまとめられている	C（1点）第三段落で第二段落と同じことを書いている

Q1 他人の文章や発想を参考にすることで、自分の文章が改善されたか？	よくなった（○）／ 変わらなかった ／ わからない ／ 悪くなった
Q2 改善されたのは「評価のポイント」①～③のうちどの項目か？	① ／ ② ／ ③(1)（○）／ ③(2)
Q3 自分が苦手としている点は何だと感じましたか？	自由記述 書く内にゴチャゴチャしてまとまらなくなってしまう。（よけいなことまでいいてるから）

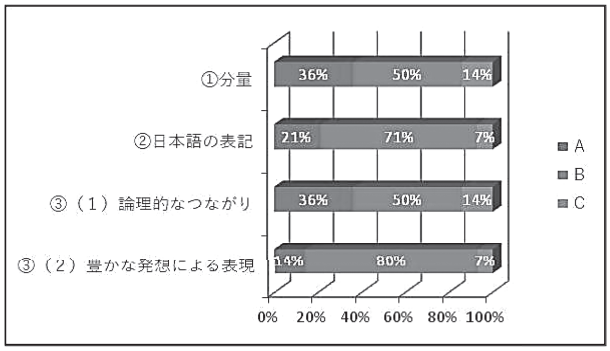
ウ　本時の振り返り

授業の最後に、もう一度自分の書いた文章を読んで、ルーブリックで自己評価させた。項目①は、多くがＢ以上で目標を達成している。項目②についてもＢ以上が多く、中には文章の誤りがなく授業者からはＡを付けられるが、生徒自身ではＢを付けている者が数名いた。

項目③(1)は、自分自身の評価と授業者による評価に最もずれが見られた項目である。特に文章の論理性が理解できていない生徒は、評価基準が分からずに、やや高めに評価を付ける傾向があった。

しかし、他者の文章を参考に推敲したことで、別々の言葉の共通点をまとめて書く方法や言い換える方法（例：「復活」・「誕生」→「生まれ変わる」）をまねて、書き換えがうまくいった生徒が多かった。項目③(2)は、ほとんどの生徒がＢを付けている。文章力のある生徒は、発想や表現の在り方に課題を見いだした。

評価指標に基づく自己評価の結果



(3)　次時以降の学習活動

ア　振り返りシートの結果

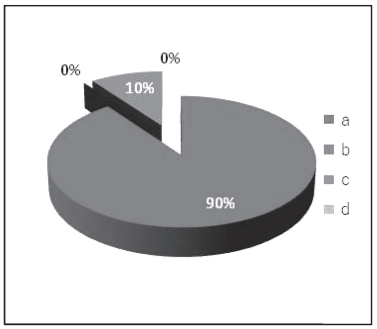
ワークシートの清書と振り返りシートによる自己評価を授業者が再評価したものを返却し、自分自身の課題について確認させた。生徒自身が認識して記述した文章作成上の課題と、授業者が生徒の清書した文章から読み取った課題が一致しているかについて、互いに確認することで、生徒自身が本当に課題を認識できているか、生徒にフィードバックしていった。

イ　アンケート調査

(ｱ) 質問①：他者の文章や発想を参考にすることで、自分の文章が改善されましたか。

９割の生徒が他者の文章や発想を参考に自分の文章が改善されたと回答している。このことから、本時の目的である「他者のよい部分を取り入れる」という点は十分に達成できたと考える。

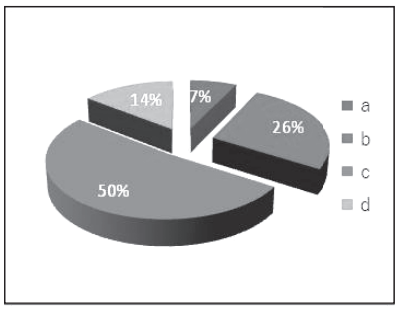
回答		%
a	改善された	90%
b	変わらなかった	0%
c	わからない	10%
d	悪くなった	0%



(ｲ) 質問②：改善されたのは評価のポイントのうちどの項目ですか。

半数の生徒が「論理的なつながり」について改善されたと述べている。これは、他者の文章を読み、その後で自分の文章を読み返した際に、文章のつながりでの違和感や他者を模範とした推敲ができたことが要因と思われる。

回答		%
a	①分量	7%
b	②日本語の表記	26%
c	③(1)論理的なつながり	50%
d	③(2)豊かな発想による表現	14%



(ｳ) 質問③：授業をして自分が認識した課題は何ですか。（自由記述）

それぞれの生徒が認識した課題は多種多様であり、個々に多様な視点をもって授業に取り組んだことが分かった。以下は、その一例である。

・語彙力がなく言葉が出てこない。　**・書き始めが浮かばなく、書くのが遅くなる。**

・豊かな発想で表現すること。　**・余計なことまで入れてしまい、文章がまとまらない。**

・句読点を入れる位置が分からない。

(4) 課題及び改善策

ア　ルーブリックによる評価指標の段階設定

第１回目の検証授業で、ルーブリックの段階数が少なく高評価に偏りがちになったことから、第２回目ではルーブリックの段階数を増やし、生徒が自分で評価できるよう評価の文言を具体的に示した。しかし、本事例の対象生徒の実態から、今回の検証授業では４項目×３段階に段階を減らした。その際、全ての段階に加点をし、Ａには「誰が読んでも」、「見事である」、「発想豊か」などのやや難易度が高い評価の文言を入れた。今回の授業では生徒全員が原稿用紙の半分以上を埋めることができていたが、振り返りの際に、自己の課題として、書き始めの遅さや全体的な書く速度の遅さを挙げていた生徒は、特に筆が止まってしまっており、今回の授業で設定した目標が難しいと感じていた。

イ　ルーブリックによる評価指標の項目設定

評価指標に基づく自己評価の後、授業者が再評価しワークシートを返却した。授業者による再評価で最も生徒自身と授業者の評価にずれがあったのは項目③(1)である。生徒は、振り返りの自由記

述で「三段落でまとめるところ」や「文のつながり」を課題として挙げていた。文章や段落の論理的なつながり方の良し悪しが分からず、評価自体も適切に行えなかったものと考えられる。よって、論理的であるということを分かりやすくするためには、より具体的な文言としてルーブリックに落とし込む必要がある。また、項目②「主語述語のねじれ」も直せていない生徒がおり、生徒の自己評価や相互評価だけではなく、授業者による生徒へのフィードバックが欠かせない。

Ⅵ　研究の成果

1　今回の実践事例

今回の研究では仮説に基づき、「書くこと」の単元を設定し、目的や対象及び論理性を意識できる課題を提示した。書いた文章については、相互評価や推敲する活動を通して、よりよい表現を見いだし書くことを目指した。また、これらの活動の中でルーブリックを活用し、生徒に評価指標を認識させることで、活動の見通しをもたせ、自らの課題を認識し、解決を図る力を伸長させることを目指した。実践事例で得たデータ・資料を基に仮説を検証する。

2　仮説の検証

(1) 仮説１　自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現する活動を行うことで、他者を意識したよりよい表現を見いだし書く力を育むことができる。

ア　課題設定及び相互評価活動の効果

全ての検証授業で、目的や対象及び論理性を意識できるような課題を提示し活動させることで、生徒が他者に分かりやすく伝える意識をもち、客観性をもった文章を書くことを目指した。アンケート調査の結果を見ると、実践事例１では71％の生徒が、「授業の課題を通して、読み手に分かりやすく伝えること」を「意識した」・「概ね意識した」と回答している。また実践事例２では肯定的評価が 82％に向上している。これらの結果から、授業者が、繰り返し、円滑に指導を行ったことで、生徒が読み手を意識して記述できるようになったものと考える。

また、全ての検証授業で、自らの課題を知り、他者のよい部分を取り入れるために、書いた文章を相互に考察し、推敲する相互評価の活動を行い、生徒がよりよい表現を見いだし書く力を伸長させることを目指した。アンケート調査の結果を見ると、「他人の文章や発想を参考にすることで、自分の文章が改善された」という項目に対して、実践事例１では 74％の生徒が、また実践事例２では87％、実践事例３では90％が「改善できた」、「概ね改善できた」と回答している。実践事例１では、生徒から「自分では気付けない部分が結構分かった」、「段落を二つに分ければ見やすかった」という感想が得られた。ほかにも、文章記述による相互評価において、他者が書いた評価文を参考にしてよりよい評価文を書こうとしている生徒も見られたことは、相互評価を行った効果だと考える。これらの結果は、本研究において課題としていた「他者を意識したよりよい表現を見いだし書く力」や「生徒自身が自覚的に振り返り、自己の課題を認識し、解決を図る力」を伸長させるために、ワークシートの構成や学習の手順を工夫をしたためであると考える。

イ　仮説１の検証

上記アのとおり、自分の思いや考えを目的や対象に応じて表現する活動を行うことで、よりよい表現を見いだし書く力を育むことができると考えられる。

(2) 仮説２　学習活動の到達目標を可視化し、振り返る経験を積ませることで、自らの課題を認識し、解決を図る力を育むことができる。

ア　評価指標活用の効果

全ての検証授業において評価指標としてルーブリックを活用することで、生徒に学習の到達目標を認識させることをねらいとした。その上で、振り返りをさせることで、生徒が自らの課題を認識し、改善や課題解決を図る力を伸長させることを目指した。アンケート調査の結果を見ると、「ルーブリックを見て、評価のポイントや到達目標を認識したか」という問いに対して、実践事例１では87%の生徒が「意識した」、「概ね意識した」と回答している。また実践事例２では 75%が肯定的に回答している。

また、「授業を通して自分が認識した課題は何か」という問に対して、実践事例１では「文を短くまとめること」、「段落を区切る」という回答の他、「選んだ論語の章に合わせた内容を書く」、「具体例をしっかりと示して、結論を分かりやすくする」といった回答があり、論理性や構成に関する課題をも認識できたことがうかがえる。また実践事例２では「自分がよい文だと思っていても、相手にはまだ伝わらない」「語彙力が不足している」、実践事例３では「書き始めが浮かばなくて、書くのが遅くなる」「句読点の位置が分からない」といった回答があり、日常的に「書く活動」を行い、それを授業者や他の生徒が評価することで改善できる要素があると読み取れる。

さらに、「優れた表現」をするために必要なことを問うアンケートに対して、実践事例１では「具体的に書く」、「段落を区切る」、「文を短く区切る」といった回答の他、「読み手の気持ちを考える」、「相手が読んで意味が通じるかどうか、客観的な視点をもつこと」という回答が見られた。実践事例２では「場面にふさわしい言葉遣い」「自分の意見が明確に述べられていること」「分量の多い本や見本になる文を日頃から見付けてまねる」といった回答があった。これらの結果から、他者の視点を通して、自分の書いた文章を読み直したり、他者の表現を取り入れたりすることで、よりよい表現を見いだそうとする意識が醸成されたことがうかがえる。

イ　仮説２の検証

上記アのとおり、学習活動の到達目標を可視化し、振り返る経験を積ませることで、自らの課題を認識し、解決を図る力を育むことができると考察した。

Ⅶ　今後の課題

１　計画的な授業構想

本研究では、主体的・協働的な学習の指導と評価を充実させる手立てとして、評価指標である「ルーブリック」を活用した評価と振り返りを通じて、「他者を意識したよりよい表現」を見いだすことを主眼に授業実践を行った。以下の２点が今回の研究の課題である。

⑴　「書くこと」の指導時間の確保、及び研究・実践の蓄積

今回の研究では多くの先行研究や事例を参考にしたが、高等学校での「書くこと」の指導に関する事例が少ないこともあり、検証授業を検討していくに当たって多くの紆余曲折があった。また、実際の授業の中では、文体の統一や主述の一致ができていない生徒、自分が書いた文章を他者が読むという意識や他者が読みやすい文章を書こうという視点の乏しい生徒など、「書くこと」に関する基本的な知識・技能や意識が身に付いていない生徒は少なくなかった。

現行の学習指導要領では、国語総合における「書くこと」を主とする指導には約 30～40 単位時間程度を配当することとしている。しかし現状では、「Ⅱ研究の視点」で挙げたように「書くこと」の学習指導が十分に行われておらず、指導の質の改善とともに量である時間を確保することが必要であると考える。

適切に指導時間を確保し、よりよい表現、目的や対象に応じた表現についてイメージさせ、実際に文章として表現できる力を確実に定着させるため、反復して取り組むことが必要であると考える。

また相互評価に関しても、生徒は相手に遠慮して、安易に高い評価にしてしまう傾向が見られた。そのため、授業者が生徒の前で模範的に評価を行い、評価の仕方を理解させておくこと、また計画的・継続的に相互評価を行う機会を設け、生徒に経験を積ませることが必要である。特に文章記述による相互評価は、語彙や経験の不足から評価文を書けない生徒が多く見られた。望ましい評価例を示すとともに、文章を表かする経験を積ませることが必要である。

(2) ルーブリックの効果的・計画的な活用

評価指標を効果的に示すことに役立つルーブリックについて、本研究では、チャレンジスクール、専門高校など特色ある学校で、それぞれに活用方法を試行してきた。生徒の学習経験、習熟度といった実態が違えば、当然作成するルーブリックも違うものとなり、各学校や教科で、生徒の実態を踏まえた適切な目標設定によるルーブリックの作成が求められる。

当然ながら、評価項目、評価基準、記述内容、基準の細分化の度合いは十分検討する必要があるが、例えば「～が明確である」といった記述では、「明確」という語が具体性を欠き、生徒の混乱を招く懸念がある。ルーブリックの記述は具体的にし、提示の際は丁寧に説明して理解させる必要がある。さらに、生徒が自らの課題と次に目指すべき目標を認識するには、評価基準の記述は生徒を主語とし、「～できる」という表現に統一する必要がある。

また、ルーブリックの評価基準欄について、学習到達目標の設定が適切でないと、改善すべき課題を見付けられない生徒も出てきてしまう。よって、さらに上位の到達レベルを設ける等、生徒の実態に合わせた学習到達目標や段階の区分を設定する必要がある。

ルーブリックは先述したとおり、学習の見通しを立てさせ、課題や次の到達目標等を認識させる重要な役割を果たすものであり、一つの単元の中で、どの時期にどのようなルーブリックを提示するか十分検討し、計画的に活用することが大切である。今回の研究では、ルーブリックを事前に示した上で、生徒同士で到達目標を共有し他者の評価を取り入れることで、自己評価の精度を高めるよう意図して活用した。ルーブリックという一つのツールを、効果的に活用するためには、意図的・計画的に活用する必要がある。

２　国語科の果たす役割

現行学習指導要領では、現在の「知識基盤社会」においては、国語による表現と理解の能力及びそれを基盤とする伝え合う力は、社会の変化に主体的に対応できる力を支える基礎的・基本的な能力として、今後一層必要性を増してくると明記されている。また次期学習指導要領に向けた「審議のまとめ」でも、言語活動の充実を一層図る必要性が指摘されている。言語能力の育成を中心となって担う国語科の果たす役割と責任は極めて大きく、今後も増していくと言える。

しかし一方で、次期学習指導要領に向けた審議のまとめでは、国語科の現状として、主体的な言語活動が軽視され伝達型授業に偏っている傾向があること、「書くこと」の学習が十分に行われていないこと、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること等が課題として挙げられている。

本研究では、これらの現状や課題を受けて、主体的・協働的な学習の指導と評価を充実させる活動を行い、適切に言葉で表現する力の育成を目指した。評価指標をはじめとして汎用性を意識して取り組み、「書くこと」の指導に関する事例が少ない中、各学校でも実施可能なモデルを意識して示した。

今後新しい時代を迎えるにあたり、我々、国語科の授業者は、現状の課題と求められる役割を十分に自覚し、絶えず研修と実践に取り組むことを通して、その使命と責務を果たしていく必要がある。

平成２８年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　国　語

学校名	課程	職名	氏名
東京都立六本木高等学校	定時制	主任教諭	下井　孝之
東京都立六本木高等学校	定時制	主任教諭	福島万葉子
東京都立浅草高等学校	定時制	主任教諭	曽田　康裕
東京都立大田桜台高等学校	全日制	教　　諭	鈴木　周太
東京都立葛西工業高等学校	全日制	教　　諭	◎鈴木　仁志
東京都立稔ヶ丘高等学校	定時制	教　　諭	永見　　圭
東京都立八王子拓真高等学校	定時制	教　　諭	石井　　陽
東京都立小平南高等学校	全日制	主任教諭	畠山　　淳

◎世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　　石沢　一元

平成２８年度

教育研究員研究報告書

高等学校・国語

東京都教育委員会印刷物登録

（平成２８年度第１４２号

平成２９年３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０−６８４９
印刷会社　株式会社オゾニックス

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。